

『神奈川県立博物館研究報告—人文科学—』第五十二号 抜刷（二〇二五年十二月）

【論文】

神奈川県立歴史博物館所蔵大勝金剛像に関する一試論

樋口美咲

【論文】

神奈川県立歴史博物館所蔵

大勝金剛像に関する一試論

樋口 美咲

【キーワード】

大勝金剛 恵什 『瑜祇経』

【要旨】

大勝金剛は『金剛峯楼閣一切瑜伽瑜祇経』を唯一の典拠とする尊格で一面十二臂に表される。おもに敬愛法や息災法等について修される大勝金剛法の本尊である。

本稿で取り上げる神奈川県立歴史博物館の大勝金剛像は、金剛杵と金剛鈴を腹前で執る点に特徴がある画像で、画像作例のなかに類をみない。この特徴的な画像が仁和寺・恵什所伝の画像と一致することに注目し、恵什所伝の画像の由来や相承のようすを事相書類に確認すると、恵什の画像が大勝金剛を十二臂大日とする尊格理解とともに相承されていたことがわかった。恵什の習いは狭義の小野流で相伝されており、なかでも勧修寺流諸師の事相書類にそれを重んじていたようすが認められることは、当館所蔵の大勝金剛像の制作背景を物語っていると考える。

はじめに

神奈川県立歴史博物館が所蔵する大勝金剛像（以下、歴博本）（図1）は、神奈川県立歴史博物館の前身・神奈川県立博物館の開館準備の段階で一九六七年十二月二十一日に購入されて以降、当館の名品として紹介されてきた^①。しかし張りのある肉体表現からその制作が十三世紀に遡り、数少ない大勝金剛像の中世仏画作例とする以上の研究は進められてこなかった。



図1 神奈川県立歴史博物館蔵大勝金剛像

大勝金剛は『金剛峯楼閣一切瑜伽瑜祇経』（以下、『瑜祇経』）のみを本拠とする尊格で、敬愛や息災、兵難を避けることなどが期待される大勝金剛法の本尊として、その独尊画像あるいは大勝金剛曼荼羅が懸用された。しかし現存する大勝金剛の画像作例は決して多くない。単独で描く画像は歴博本の他に、京都・東寺本や大倉集古館本、愛媛・石手寺本が確認され、別尊曼荼羅では京都・悲田院本大勝金剛曼荼羅や、京都・醍

醐寺本、高知・金剛福寺本が知られる程度である。一方、図像集などではいくつかバリエーションをもって伝わっている。

これら現存作例については、個別の詳細な作品解説^②がなされているが、諸本間の図像の差異には検討の余地が残る。わたくしは特に金剛杵と金剛鈴を執る二手に注目し、現存する絵画作例や図像類に表された大勝金剛の図像を三つに分類した上で、京都・悲田院本の中尊・大勝金剛の図像は特異であることを指摘し、そこには十二世紀後半の醍醐における『瑜祇経』の解釈と大勝金剛の尊格理解が色濃く反映されている可能性がある^③ことをすでに指摘している。

歴博本もまた大勝金剛画像では類をみない図像で、大勝金剛の尊格理解や特殊な事情が反映されている可能性がある。

そこで歴博本の図像的特徴を指摘し、この図像がどのような尊格理解とともに継承されたかを探ることで、歴博本の制作背景について一試論を示してみたい。

一 所依の經典と大勝金剛の図像

大勝金剛について説く『瑜祇経』は唐・金剛智訳、一説に不空訳とされ、開元録や貞元録にみえず、梵本やチベット訳も知られていないことから中国における偽作とされるが^④、日本へは空海(七七八〜九二七)をはじめ、諸入唐家によって請来されて重んじられ、注釈書や口決が著された。『瑜祇経』は空海請来時には『金剛頂経』系經典とされていたが、東密では平安時代後期頃から金胎両部而二不二の經典と理解されるようになる。鎌倉時代以降『瑜祇経』所説の尊格について記す事相書では両部而二不二の側面が強調されるようになる^⑤。

現在、『瑜祇経』は二卷十二品からなり、序品に『瑜祇経』全体の源底

が示され、続く十一品はそれを開説したものである^⑥。大勝金剛の本扱は『瑜祇経』のうち「一切如来大勝金剛心瑜伽成就品」第七(以下、第七品)と、「一切如来大勝金剛頂最勝真実三昧耶品」第八(以下、第八品)である。

『瑜祇経』第七品は、「愛染王品」第五、「一切仏頂最上遍照王勝義難摧摧邪一切処瑜伽四行撰法品」第六とともに愛染明王について説くが、大勝金剛の種子も明らかにしている。『瑜祇経』第七品の概略は、金剛手が金剛薩埵身を成就するための真言とその効能を説く諸菩薩が会座する場に、突然一障者が忽然と現れる。諸菩薩はこの障者がどこから来たのかわからないが、薄伽梵がこの障者は一切衆生の本有俱生の障で、自我所生の障であると説明すると、障者は金剛薩埵に変身し、仏の聖旨を受けて、自性障(自我所生の障)の金剛頂法を説き、愛染王の根本一字心すなわち大勝金剛心(ウン)を体得すれば、自性障そのものが金剛身となると示し、金剛薩埵は消失するという内容である。ここで説かれる(ウン)字が広く大勝金剛の種子とされてきた。

第八品には大勝金剛の形像や功徳を記し(句読点、傍線、…の略記号は、わたくしによる。種子は()内にカタカナで表記した。以下同じ)、

爾時遍照薄伽梵、復現種種光明。於頂上放金剛威怒光明、照諸菩薩。金剛手等皆各默然。復現身手。具十二臂。持、智拳印。復持五峯金剛、蓮華、摩尼、羯磨、鉤、索、鎖、鈴、智劍、法輪、十二大印。身住千葉大白蓮花。身色如日。五髻光明。其光無主遍於十方。面門微笑。即說大勝金剛頂最勝真実大三昧耶真言曰、
 (オン) (マ) (カ) (バ) (ザロウ) (シュニ) (シャ) (ウン) (タラク) (キリク) (アク) (ウン)

説大明已復説頌曰：刀兵不能害 水火不焚漂：若誦一百八 能滅百劫罪 若誦一千遍 能成滿意願 若誦一洛叉 得大金剛身 若誦一俱胝 得成遍照尊

と、遍照薄伽梵すなわち大日如来が十二臂の身を現し、それぞれに智拳印を結び、金剛杵、蓮華、摩尼、羯磨、鉤、索、鈴、智劍、宝輪を持つといい、日のような身色で千葉大白蓮華に住し、五髻から光明を放ち、面貌には笑みをたたえた姿を説く。これに続けて大勝金剛頂最勝真実大三昧耶の真言を明らかにし、この真言を誦せば、戦禍を退け、滅罪や満願に加え大金剛身や遍照尊を得るといふ。

現存する大勝金剛に関する絵画作例は、概ね『瑜祇経』第八品所説の形像にしたがうが、智拳印を結ぶ二手以外の十臂における持物の入れ替わりや位置に異同が生じている。これらのバリエーションについて、わたくしは金剛杵と金剛鈴を執る手の位置に注目し、大きく三つに分類を試みた。これはすでに拙稿⁴⁾にまとめたので、ここでは簡略に述べる。

まず両脇に広げた脇手十臂のうち左右一手にそれぞれ金剛杵、金剛鈴を執る像容である。『瑜祇経』第八品に説く持物に入れ替わりがあったり、持物を執る手に異同があったりといくつかのバリエーションがある。現存する絵画作例や図像類のなかで最も多いのがこの形像である。

二つめに右手で金剛杵を胸の高さで持ち、左手に執る金剛鈴を腰に当てる形像である。悲田院本大勝金剛曼荼羅の中尊・大勝金剛と、悲田院本と材質技法や法量、図様や諸尊の図像がよく合致する醍醐寺本の中尊、愛媛・石手寺本に限られ、図像類には類例が見出せない。

そして三つめが金剛杵と金剛鈴を腹前で並び立てる形像で、『画像作例』では歴博本のみである。図像類では恵什(一〇六〇～一一四五)編『図

像抄』に掲載され、以降これについて検討してゆきたい。

二 歴博本の図像と様式

歴博本の基本情報をみる。

大小四角形の絹を縦横に継ぎ合わせ、縦六十三・五、横四十一・五cmとした画面に、蓮華上の大勝金剛を描く。

大勝金剛は一面二目十二臂の菩薩形で、光背を負い、左脚を上にして蓮華に坐す。白毫相、三道相を表す。高髻を結び、両肩には波状にした髪を垂らし、耳前に一条の髪を通す。十二臂は左右第一手を胸前で智拳印に結び、腹前で右手に金剛杵を、左手に金剛鈴を立てて持ち、右の脇手は上から宝珠、鉤、鎖、劍、左の脇手は上から蓮華、羯磨、索、法輪を執る。肉身は赤色である。上半身には条帛、下半身には裳と腰布を着し、宝冠、冠繪、耳飾、胸飾、瓔珞、華鬘、臂釧、腕釧で身を莊嚴する。歴博本は『瑜祇経』第八品に説く持物や身色と合致し、蓮華に坐すのも経にしたがう。ただし光を発する五髻については、歴博本の当該箇所が料絹の傷みのために判然としないながら、五髻とは距離がある。

次いで歴博本の表現を観察する。

頭部は頬が張った丸に近い卵型の顔で、肉付きのよい丸い肩に、十二臂は丸々としており、脚部は豊かな膝幅と厚みをもつ安定した体形である。両脇に広がる脇手や持物には小さくまとまった卑弱な印象は感じられない。眉は緩やかな山なりで、眼は幅広につくる。鼻は鼻梁をもたず小鼻のみで人中をU字に表す。

肉身は赤色で頬や顎、三道の外側、肩、上腕、足には朱隈を重ねる。肉身の輪郭線は現状やや薄い墨線である。この墨線の上に身色の赤が重なっている箇所がある。伝統的な手法では最後に朱線あるいは墨線による

肉身の輪郭の描き起こしがなされるが、現状でそれを認められる箇所がなく、当初の様子を判断し難い。額毛の描き起こし線は弱弱い。両眉はなだらかに弧線を描き、両眼の上瞼は、眼頭に鋭く筆を入れ、緩やかに下方へと弧を描いて目じりでわずかに立ち上げ横方向へのびる。唇は朱色で平塗りとし、上下唇の合わせ目は濃黒色で、両端から中央にわずかに弧を描く線と、中央で下向きに尖る線をもつて表される。瞳は黒色、虹彩は群青かと思われる色を細墨線で括る。目頭と目じりにも具の色を施していたようで、伝統的な手法も散見される。頭髪は群青色だが、頭頂部は摩耗し、また白くなっており判然としない。

条帛、裳、腰布は白を地色とし、現状黒にみえる色で文様を描く。条帛は一条の線で周縁と内側を区画し、内側には立涌文を表し、その間を重ねた杏仁形で埋め、周縁部には蔓草花文を描く。裳は、脛前までの広範には四つの菊花を寄せ中央に菱をおく団花文を配置し、脛前に連珠文帯を上下に置き、その間を菊花草入りの三重格子文とし、脛前から裾部には方形渦巻入りの格子文で、裾には唐草花文を置く。ただし裾の裏側は連珠文帯としている。腰布は草花文で縁には連珠文帯を置く。衣摺と輪郭の線は金泥線とし、その間に白緑色を施す。

頭飾は花葉を正面と左右に置く意匠で、花は赤色の纏網彩色、葉は白緑の彩色が確認できる。冠繪は両耳の上で小さめの輪をつくり、背後に下げ、布端が脇手の後ろにのぞく。白色で輪郭線および衣摺線は金泥とする。装身具や持物の金属具は、現状茶色に墨線で輪郭や意匠を描き起こす。金剛杵の一部に墨線の描き起こしに金泥を添わせるが、不自然で当初とは考えにくい。装身具や瓔珞に用いられる珠は赤や白、群青で、白色を点じて、そのきらめきを表出する。

蓮華座の蓮弁は群青色・紫色系と、緑色・赤色系との二種類があり、そ

れぞれ纏網彩色とし、蓮弁の輪郭の墨線に白色の細線を沿わせる。蕊頭は白みが強い朱具で点描し、弧線状に三段に列する丹念な描写である。

以上、簡単に歴博本の表現を観察した。平安時代以降の伝統的な描法を部分的に残し、また襷線の間の白緑などには十二世紀後半に好まれた色彩が認められる。一方で頬の張った丸い卵型の顔に、うねりをもつ上瞼線と眼の縦幅の中央に据えられた瞳による意志的な表情は、十三世紀初頭とされる個人蔵孔雀明王像¹⁰や鎌倉時代初期の滋賀・法蔵寺蔵如意輪観音像¹¹、鎌倉時代前期の制作とみられる醍醐寺・虚空蔵菩薩像などに近いと思われる。また白地に現状黒色で文様を置き、輪郭と襷線を金泥線とする衣の表現は、文様に相異はあるが先に上げた個人蔵孔雀明王像にみられ、こうした表現は、京都・安楽寺院蔵孔雀明王像や京都・高山寺蔵仏眼仏母像、ポストン美術館蔵一字金輪像など、平安時代末から鎌倉時代にかかる仏画や、鎌倉時代初期から前半にかけての仏画にみられるという¹²。蓮華座について、歴博本の構成および彩色が類似するものに、十三世紀前半の東京国立博物館蔵般若菩薩像があり、これは醍醐寺蔵大日金輪像や虚空蔵菩薩像に近いという¹³。

このように十三世紀初頭から前半の作品に親近性が認められるが、頭光や身光の外側を覆う火焰は形式的で、またその輪郭を黒線で表すさまは、明確に描き出そうとする意識がより強くみてとれ、平明さを感じさせる。ただ十三世紀後半頃からみられるようになる金属具を金泥で彫塗のように彩色する表現ははまだ認められない。肉身の描き起こし線がみられない点で判断を難しくしているが、歴博本の制作時期は、今のところ十三世紀中頃と位置付けておきたい。

なお白地に現状黒色の文様を描く衣の表現について、大勝金剛が智拳印を結ぶことから『金剛頂経一字頂輪王瑜伽一切時処念誦成仏儀軌』所



図2 『図像抄』所収大勝金剛

説の一字金輪の像容「形服如素月」¹⁵が想起される。小野醍醐では大勝金剛の正体を一字金輪仏頂尊とするが、¹⁶後述するように歴博本は図像から考えるに、醍醐で相承され重んじられた図像ではないように思われる。現段階では歴博本のこの表現について答えを持ち合わせない。

三 図像の典拠とその相承

歴博本の図像が『瑜祇経』第八品に説く十二臂の印と持物が一致することはすでに確認した。今、持物とそれを執る手に注目して歴博本と一致する図像を探せば、恵什編『図像抄』掲載図(図2)や、心覚(一一一七)〜一一八〇または八二二編『別尊雜記』に掲載する大勝金剛像のうちの一図(図3)、同書所収の大勝金剛曼荼羅の中尊・大勝金剛像が挙げられる。本章ではこれらの図像の由来と相伝について考えてみたい。

高野山・円通寺伝来の恵什編『図像抄』巻第四では、「秘法等」うち「大



図3 『別尊雜記』所収大勝金剛

勝金剛」¹⁷に(割註はへ)内に記し、改行を/で示す。以下同じ)。

大勝金剛

種子(ウン)

三形 劍 或五古

尊形

經云。^{瑜祇經也}身色如日暉。五髻光明。具十二臂。持智拳印。又持五古、蓮

花、宝、羯磨、鈎、索、鎖、鈴、劍、法輪。住千葉大白蓮花印 内

縛忍願屈如頂(口決云頂/者劍形也)

:

師說智拳印用之

此尊功德能深甚也。可引見經文(云々)



図4 『諸尊図像』所収愛染曼荼羅図



図5 『諸尊図像』所収愛染曼荼羅図部分

と、種子、三昧耶形、そして尊形について『瑜祇経』第八品を簡略に引用し、本尊加持の印相を記し、その功德の奥深いことを述べ、蓮華に坐す五髻の大勝金剛像を掲げる。『図像抄』所収の図像は、左右の一手で智拳印を結び、また右の一手で金剛杵を、左の一手で金剛鈴を腹の前で持つ。ほかの八臂は身体の脇に広げ、左手は上から蓮華、羯磨、索、宝輪、右手は上から宝珠、鉤、鎖、宝剣を執る。なお鳴滝常楽院伝来の『図像抄』には、「智証大師請来像如此（云々）或有宝冠」と朱書があり、これは後述するように心覚編『別尊雜記』や覚禅（一一四三〜一二一三以後）編『覚禅鈔』に引用されていて、この図像が智証大師請来像とみなされ、また宝冠をいただく大勝金剛の存在を物語る。

恵什がこの図像を得た経緯については、恵什口・覚印（二〇九七〜一六四）記『諸口伝集（自言）』五十一「大勝金剛形像事」に、

問十二臂大日瑜祇経中専殊勝説之。而有図造形像先証乎。答云、件仏瑜祇経肝心只是也。仍大師以件仏為本尊殊作次第也。於形像者三井寺有唐本像。先年所奉尋拝見也。彼寺為究竟秘事云々。

と、『瑜祇経』においてとりわけ格別に説かれる十二臂大日すなわち大勝金剛の形像に、然るべき先証があるかという問いに対し、究竟の秘事たる三井寺の唐本像を挙げ、それを先年に拝見したと答えている。この記述は覚禅編『覚禅鈔』でも部分的に引用され、恵什が図像を収集する経緯をよく伝えているといえる。と、すれば、『図像抄』所収の図像は三井寺の唐本像とされていたものを写し得た、台密所縁の図像であったといえる。また『諸口伝集（自言）』のなかで、恵什が大勝金剛を十二臂大日

として『瑜祇經』の肝心と位置づけていること、そしてそれ故に空海が大勝金剛を本尊として次第を作成したと語る点で興味深い。

さて心覚編『別尊雜記』巻第二十九うち「大勝金剛」には、恵什と実運の二師の説を記す。恵什説の引用後に五髻三目忿怒形像、五髻菩薩形像、宝冠菩薩形で索でなく牙を持す意染像、そして歷博本と図像が一致する宝冠菩薩形の四図の独尊像と、大勝金剛曼荼羅一図が所収される。独尊像三図の後に、⁽²³⁾

或云

智証大師請来唐本愛染王万多羅中在此像

銘云十二臂大日云々

私云已上三体以宮法印御房御本写加之了

と、智証大師請来の愛染曼荼羅中に十二臂大日の銘が付された大勝金剛像があるという説を書き添え、また心覚が前の三図を仁和寺の花蔵院宮法印元性本を以て写したと註す。

智証大師請来の愛染曼荼羅とは、心覚撰『諸尊図像』巻上所収の愛染曼荼羅図(図4)の類であろう。「可尋他門事歟」と註された本図には、図中向かって左上の尊格の傍らに「大日十二臂」と記されている(図5)。宝冠菩薩形の十二臂で、その持物は『瑜祇經』第八品に説くところにしたがう大勝金剛である。この種の愛染曼荼羅図は、後述するように覚禅編『覚禅鈔』にも所収され、承澄(一一〇五―一一八二)編『阿婆縛抄』第一一五「愛染王」では尊位図が示されるほか、ニューヨーク、パークコレクションの愛染曼荼羅図が伝わっている。これらを参照すれば、愛染曼荼羅図の構成は、中央に愛染明王、その後ろに弥勒菩薩、前に観音

菩薩、左に宝幢、右に俱利伽羅劍、左上に両頭愛染、左下に不動明王、右下に大威徳明王、そして右上が大勝金剛となる。

パークコレクション本の大勝金剛像は、『別尊雜記』掲載の一図や歷博本と図像が一致している。パークコレクション本の料紙背面の左端に、「嘉承二年三月五日、以三昧阿闍梨書了件本云、大原僧都御本云々」と墨書があり、嘉承二年(一一〇七)に大原僧都長宴(二〇一六―一〇八二)本をもとにした三昧阿闍梨良祐本を以て作られた経緯を示していることから、台密のなかでも叡山において相承された図像であったとされる。⁽²⁵⁾

さらに皇慶(九七七―一〇四九)口説・長宴記『四十帖決』巻第八「愛染王 二十三」⁽²⁶⁾には、

愛染王曼陀羅ノ中尊弓箭。或、箭ヲ懸レ弓ニ云云 今不レ懸是佳キ也。又前瓶吐レ宝ヲ。数可レ隨宜ニ耳。無ニ定数ニ耳。前、觀音、巽、大威徳歟。坤、大勝金剛。上、弥勒。乾、火天歟。艮、不動。私ニ案ルニ、左右ニ二印是闕レ位ヲ安スル之ヲ歟。可レ問。師曰。一是宝幢也。一、俱哩迦羅也。大勝金剛、者。彼經ノ第八品ニ云、遍照薄伽梵、復現身手ニ具ニ十二臂ヲ。持ニ智拳印。復持ニ五峯。一乃至輪。已上寛徳三ノ年四月上旬。於ニ谷御ノ房ニ諮リ、受要事ノ等。一長宴記ニ之。

永承三年三月下旬於ニ谷御房ニ決レ之云云

とあり、その図様と寛徳三年(一一〇四六)に長宴が「谷御房」すなわち皇慶から諮詢したことがうかがえる。

さて覚禅編『覚禅鈔』巻第八十一「愛染法」⁽²⁷⁾下では、この図様の愛染曼荼羅図を掲出し、

右曼荼羅図、有安養房抄、皇慶闍梨、三井山王院大師、被渡愛染王
 〈マ〉〈タ〉〈ラ〉一幀。爰有北山隱士、竊作釈云、前後二尊慈悲一
 也。所謂弥勒大慈三昧尊、觀音大悲行門士也。左右三三昧耶福智一
 双也。幢表福、劍表智也。長坤二尊。主伴一双也。大日主。不同使
 者也。巽乾二尊愛憎一双也。其義顯然也。彼大師之御持念目錄中
 有此〈マ〉〈タ〉〈ラ〉。無其法名」：

と、安養房芳源の抄にこの愛染曼荼羅図が収められ、三井山王院大師円
 珍の請来であるという。円珍請来は皇慶の伝であろうか。そして北山隱
 士が密かに作った解釈—愛染明王の前後の弥勒菩薩と觀音菩薩は慈悲の
 一双であり、左右の宝幢と俱利伽羅劍は福智の一双であり、長坤の大日
 如来と不動明王は主伴の一双であり、巽乾の二尊は愛憎の一双である
 という、愛染明王を中心に対称に位置する尊像の關係性—を記している。こ
 こに北山隱士の釈では愛染曼荼羅の長に位置する尊格を「大日」とする
 理解がみとれる。

現在のところ北山隱士について明らかにし得ないが、恵什が石山淳祐
 の付法に連なり、淳祐—真頼—雅真—曆海—遍日—修仁—増蓮—芳源—
 恵什⁽²⁸⁾という法流を思えば、芳源から恵什へこの大勝金剛の図像とともに、
 大勝金剛を「大日」とする理解が相承された可能性は大にある⁽²⁹⁾。

以上より歴博本の—腹前で金剛杵と金剛鈴を並べ立てて持つ点特徴
 とする—図像は、『図像抄』や『別尊雜記』所収図と一致し、その図像の
 由来を遡れば、円珍ないし三井寺に由縁をもち、恵什が直接または師芳
 源を経由して収集した可能性のある図像ということができる。また五髻
 か宝冠かの違いに拘わらず、大勝金剛を十二臂大日と理解していたこと
 がうかがえた。

四 大勝金剛の尊格理解と大勝金剛法

ここまで歴博本の図像は恵什所伝の大勝金剛図像に典拠が求められ、
 また恵什が大勝金剛を十二臂大日と理解していたことを確認してきた。
 本章では歴博本の制作背景と目的について、恵什の尊格理解と所伝の図
 像を手掛かりに検討してみたい。

『瑜祇經』に説く尊格の理解は諸宗諸流派で一樣でないことはすでに指摘
 されている⁽³⁰⁾。光宗(一一七六—一三五〇)編『溪嵐拾葉集』「仏眼法事 秘
 曲」には、

尋云、彼經有二十二品。此品皆教主。一一尊又經總体見
 。仍弘法大師ハ以愛染ヲ為一經總体。智証大師ハ大勝金剛品以
 為一經總体ト。山門流ニ何カ故ソ以仏眼ニ独此經總体云。耶。示
 云、弘法大師相承ノ様ハ以愛染為經体ト。其故ハ愛染三面六臂左
 ノ面ニ仏眼、右ノ面ニ金輪、中ノ面ハ愛染也。故ニ以テ兩部不二總体ヲ為
 愛染ト。今ノ經又兩部不二經王也。尤以愛染為經体。其義甚深
 也。已上東寺流義。

次智証大師御相承様ハ、大勝金剛ト者一身ニ十二臂アリ。此、一一印相ハ
 十二品法門ヲ表示セリ。故ニ大勝金剛ヲ以一經總体トシ給ヘリ。已上三井寺
 流義

次慈覚大師御相承様ハ、以テ仏眼ヲ為一經總体ト。今ノ經中ニ仏眼
 ノ題号ヲ置ニ吉祥成就品ト題セリ。吉祥ト者妙ノ義、成就者悉地義。故ニ吉祥
 成就妙成就蘇悉地ノ名号也。

と、十四世紀頃の『瑜祇經』所説の尊格に対する理解がみられる。東寺、

すなわち東密では愛染明王を、寺門では大勝金剛を、山門では仏眼仏母を『瑜祇經』の総体とするという。寺門においては、大勝金剛の十二臂とその印相を『瑜祇經』の十二品と結びつけ、大勝金剛を『瑜祇經』の総体としていたが、慶範(一一五五―一二二二)撰『宝秘記』八「瑜祇經十二品始終事」には、

予申云、禪仁物語云、瑜祇經十二品、東者人併愛染王、山門人説仏眼法也、^此同此門跡如何云々、此条如何。仰云、始終何法云申、不可習学之、但存旨、仏眼或愛染王品々不定也、四品愛染王儀伝受、然者又余品愛染王^{トモ}不可習之歟

と、『瑜祇經』十二品を東密では愛染王、山門では仏眼法を始終説いていることを挙げ、寺門派ではいかんとするか、という問いに對する慶範の師・真円の答えからは、この習いを受けていなかったことが読み取れる。一方で大勝金剛を本尊とした別尊法に注目すれば、『門葉記』勤行法「一。常途勤行御修法等事」⁽³³⁾で、東密、山門、寺門で勤行される修法をそれぞれ大法、准大法、秘法と整理するなかに、

秘法

：

如意宝珠

大勝金剛

転法輪

五大虚空蔵

已上東寺修之

と大勝金剛は秘法のうち「東寺修之」とされているから、大勝金剛法はもっぱら東密で勤修されていたとみてよさそうである。そこで以降は、東密に注目して大勝金剛の尊格理解の様相をみてゆきたい。醍醐の学匠・教舜(一二六四頃)は、『秘鈔口決』第十八「大勝金剛法」⁽³⁴⁾で、大勝金剛の理解について東密諸師の説とその根拠を挙げている。少々長い引用してみれば、

秘法生起事

惠什云、十二臂大日^{ナリ}。(ユ) (ギ) 經^ニ專^ラ殊勝^ニ説^レ之^ヲ。彼^ノ經^ノ肝心只是也。仍^テ大師以^ニ一件^ノ仏、為^ニ本尊^ニ。殊^ニ作^ニ次第^ニ也。於^ニ形像^ニ者三井寺^ニ有^ニ唐本^ノ繪像^ニ。先年所奉^ニ拜見^ニ也。(彼^ノ寺^ノ為^ニ究竟^ノ秘事^ニ云々。又^ニ云、十二臂大日説^ニ彼經^ノ十二品^ニ云云) 或^レ口云(実^ニ任^ニ今^ノ法^ノ、最極甚深究竟^ノ秘法^ニ。而^レ近來絶事^ノ(歟)。或^レ云、尊勝軌云、今礼^ニ(ユ) (ギ) (ユ) (ギ) 是大日尊文 依^レ今尊也云云。鳥羽僧正云、大勝金剛^ノ十二臂^ノ愛染王^ノ習^フ事、仁和寺秘事云云。覺禪抄云、問云十二臂^ノ像雖^レ出^ツ。(ユ) (ギ) 經第八品、不^レ云^ニ愛染王^ト如何。答、御經藏^ニ在^ニ此^ノ函^ニ而已 無^シ他様^ノ像^之。大師御書付^ニ云^ニ愛染王^ト也云云。或^レ云、大勝金剛^ト者十二臂^ノ金剛薩埵也。宝樓閣經^ニ説^ニ十二臂^ノ金剛薩埵^ヲ。但^シ彼^ノ經^ニ不^レ出^ツ持物^ヲ。此^ノ經^ニハ説^ニ持物^ヲ。又^レ彼^ノ經^ハ一身四面十二臂^ヲ。此^ノ經^ハ一身十二臂^ヲ云云(宮僧正覺源十二臂^ノ金剛薩埵云云) 四面^ハ表^ニ四部^ヲ、雖^レ一面^{ナリ}四徳宛然^{ナリ}。仍^テ非^ニ相違^ニ歟云云。御口云、付^テ此^ノ尊^ニ師師^ノ伝雖^レ不同^{ナリ}所^レ詮^{スル}、当流^ノ習^フ撰^ニ切^ニ仏^ノ頂^ノ輪^ノ王^ト為^ニ正^ト伝^ト也。

と、まず恵什の説について、先述した『諸口伝集(自言)』を引用し、大勝金剛を十二臂大日とみなすことを記す。勸修寺実任(一〇九七—一六九)は大勝金剛法を「最極甚深究竟秘法」とする。文脈からは実任もまた同様の理解をしていたとみてよからう。次いで鳥羽僧正範俊(一〇三八—一一二二)の、大勝金剛を愛染明王とすることは仁和寺の秘事であるという伝を引く。さらに宮僧正覚源らの大勝金剛は十二臂の金剛薩埵であるとする説をあげる。そして最後に諸師の伝は一通りでないが、醍醐においては撰一切仏頂輪王を正当とすると、教舜が連なる自流の主張を述べる。大勝金剛を十二臂大日とみなす恵什の伝は、十三世紀の東密諸流の解釈のうちの一つであった。ここからは恵什が大勝金剛を十二臂大日と理解していたことに加え、大勝金剛は『瑜祇経』の肝心でありそれ故に空海が大勝金剛を本尊として次第『一切如来大勝金剛頂最勝真言三昧耶品次第観念』³⁵⁾を作成したこと、また大勝金剛の図像が円珍所縁の唐本絵像に由来することがあわせて相伝されてきたようすが認められる。

空海や恵什の伝は東密のなかでも狭義の小野流で用いられたというから、³⁶⁾ 歴博本が小野流を背景に制作されたことを想定し得る。今、そのいずれかを判断することは難しいが、勸修寺流の事相書類に直接的な影響を見出せるのではなからうか。恵什と勸修寺寛信(一〇八四—一一五三)との交わりは、恵什が写した芳源書写の慈円編『曼荼羅問答』を寛信が筆写したという奥書を有する写本や、恵什口・寛信記の『諸尊法』一卷の存在から明らかにされている。³⁷⁾ 寛信が『伝受集』巻第四「愛染王 十二」で「或云、愛染王曼荼羅、大日十二臂也云云」³⁸⁾ というのにはこうした背景があろう。また興然(一一二〇—一一三三)が寛信、明海、実任、観祐の四人の師から受法したものを集めた『四卷』第二「大勝金剛

法』では「本、十二臂大日」と、別尊法の本尊を十二臂大日と定めている。覚禪編『覚禪鈔』では先に挙げた寛信や実運の説を引用するほか、善無畏訳『尊勝仏頂脩瑜伽法儀軌』巻上「尊勝真言序品第一」の「是故我今礼瑜祇 瑜祇即是大日尊」³⁹⁾ を引用して、「依此文者、瑜祇即十二臂大日也。故経始終、偏依今尊也」と『瑜祇経』が始終十二臂大日を説くことの憑証としているのである。

以上、勸修寺流諸師の事相書類に大勝金剛を十二臂大日とする理解が認められた。十二臂大日とする理解は、恵什の伝としてその図像とともに相承されてきたことを思えば、歴博本の制作背景には小野三流のなかでも勸修寺流における相承があった可能性を想定できよう。⁴⁰⁾

最後に歴博本の制作目的について若干の考察を加えてみたい。大勝金剛を本尊とする大勝金剛法は敬愛法と息災法について修す。⁴¹⁾ 息災法のなかには建保六年(一一一八)の中宮の御産平癒のための大勝金剛法もあつた。⁴²⁾ そのほか教舜の『秘鈔口決』巻第十八「大勝金剛」には、

経云、若末世ノ人長ク誦ハニ此真言一、刀兵不能害、水火モ不二焚漂
一文 或人云、師云、大勝金剛法ハ息災敬愛共ニ可修之也。鎌倉大
将^{頼朝}兵乱合戦ノ時、大勝金剛ノ真言ヲ鎧ノ袖ノ下ニ金物ノ境ニ打レ之、袖、
上ニ勝ノ字ヲ書レ札ニ付レ之。即依^ルニ今文一歟

と、息災と敬愛に加え、『瑜祇経』第八品が説く大勝金剛の真言を誦すことで得られる兵難を退ける功德を引用し、頼朝が合戦に際し大勝金剛真言を鎧下の金物境に打ち付けたという伝承が記される。

ここで再び恵什説・覚印記『諸口伝集(自言)』「五十一 大勝金剛形像事」⁴³⁾をみれば、

近大和国有聖人多遇賢哲学秘法。件聖人殊為祈寿命百日修此法。有夢想告、保九旬暇筭。親謁之（云々）

と、大和国の聖人が賢哲より学んだ秘法で百日の寿命を得ることを祈願したという恵什の口伝が記されており、息災法のなかでも延寿を目的とした修法は注目される。

修法と凶像の關係で興味深いのは、醍醐寺に伝わる貼紙墨書に「宗命本」と記される大勝金剛凶像（以下、宗命本）である。宗命（一一一九～一一七一）は醍醐・理性院流の人で、保元二年（一一五七）十二月二十二日から百カ日、美福門院の仰せにより、高松女院の不祥や悪事、悪人、怨念の消除と、宮内の安穩等を目的に大勝金剛供を行った。その巻数が『覚禅鈔』巻第十六「大勝金剛」上に記録される。この大勝金剛供には法験があり、宗命本はこの時の本尊画像の凶像をとどめている可能性が指摘される⁴⁶。

宗命本のように効験のあった修法の記録と凶像が継承されてきたことを踏まえれば、恵什所伝の凶像と修法を結び付けて考えることもできるのではないか。歴博本は絵画作例では他に類例をみない恵什所伝の凶像に基いており、その事情について想像をたくましくするならば、息災法のうち延寿を目的とした修法本尊として制作された可能性を想定することも許されよう。

おわりに

本稿では歴博本の凶像が、恵什が相伝したであろう愛染曼荼羅に配される大勝金剛と凶像の特徴を共有していることを指摘した。これは現存

する大勝金剛画像では類例のない凶像である。また恵什は大勝金剛を『瑜祇經』の肝心である十二臂大日とする理解を示し、後世の凶像集や事相書類にはこの凶像とともに大勝金剛を十二臂大日とする理解が所収されていた。こうした恵什の習いは小野三流にみえるとされるが、わたくしはそのうち特に勧修寺流の相伝のなかに恵什の習いを見出し、歴博本の制作背景と想定した。さらに歴博本が恵什所伝の凶像に基づく事情をうかがい知る上で、考え得ることとして恵什口伝の延寿を目的とした修法本尊としての可能性を示した。

『瑜祇經』に關係する画像では、『瑜祇經』所説の尊格の別尊法における本尊画像のほかに、『瑜祇經』序品に基づく瑜祇灌頂で用いられたとみられる三昧耶形⁴⁷や『瑜祇經』金剛薩埵菩提心内作業灌頂悉地品第十一所説の「十五尊布字住所」の凶像の存在が明らかにされており⁵⁰、しかも両者ともに称名寺に伝わり、勧修寺流の法脈のなかで用いられたものであるという⁵¹。

『瑜祇經』第八品には阿闍梨の行法が説かれ、これに基づく空海の觀念次第がある。また安然『金剛峰楼閣一切瑜祇經修行法』にみえる阿闍梨の行法の解釈は東密の事相書類でも引用される。覚禅は『覚禅鈔』巻第十六「大勝金剛上」で引用したのち「愚案云、序品（マ）（タ）（ラ）、中尊大日十二臂歟。秘彼品説今品歟。」と、序品と第八品の三十七尊曼荼羅を関連づけて考えており、『瑜祇經』第八品の行法と『瑜祇經』所説の凶像は検討する必要がある。これは今後の課題としたい。

註

- (1) 『再編十周年記念 館蔵美術工芸名品展』神奈川県立歴史博物館、二〇〇五年四月、六頁。
- (2) 参照した大勝金剛画像の主な作品解説は以下。
- ① 真保亨 作品解説「大勝金剛曼荼羅」『別尊曼荼羅』毎日新聞社、一九八五年十二月、二二六頁。
- ② 作品解説「大勝金剛像」『秋期特別公開図録 東寺と「太平記」』東寺（教王護国寺）宝物館、一九九一年九月、二二頁。
- ③ 泉武夫 作品解説「大勝金剛曼荼羅図」『王朝の仏画と儀礼』至文堂二〇〇〇年十一月、三六六頁。
- ④ 有賀祥隆「大勝金剛曼荼羅図」『醍醐寺大観』二、岩波書店、二〇〇二年五月、解説二二頁。
- ⑤ 真鍋俊照「密教図像と別尊曼荼羅の構想」『印度学仏教学研究』一三七、日本印度学仏教学会、二〇一五年十二月。
- ⑥ 有賀祥隆「別尊曼荼羅に就いて」『国華』一四四五、国華社、二〇一六年三月
- ⑦ 武田和昭「石手寺の仏画」『四国霊場第五十一番札所石手寺総合調査報告書』愛媛大学法文学部附属四国遍路・世界の巡礼研究センター、二〇一七年三月、三九頁。
- ⑧ 佐々木大樹、那須真裕美 図像解説「大勝金剛曼荼羅」『曼荼羅集 興然編 上巻』、同朋舎新社（合同会社DOHOP）、二〇一九年六月、七十九頁。
- ⑨ 林温「別尊曼荼羅と日本の密教」『曼荼羅集 興然編 上巻』、同朋舎新社（合同会社DOHOP）、二〇一九年六月、三三四頁。
- (3) 樋口美咲「京都・悲田院所蔵大勝金剛曼荼羅に関する一考察」『密教図像』四十四、密教図像学会、二〇二五年十二月（発行予定）。
- (4) 三崎良周「台密の研究」創文社、一九八八年六月、一三七頁。
- ただし中村元東方研究所田中公明氏の教示によれば、『瑜祇経』第八品に説かれる大勝金剛の一面十二臂のように、一面二臂の金剛界大日に脇手を付加する図像について、パーラ朝時代には一面二臂で智拳印を結ぶ金剛界大日に脇手を付加する四面八臂像が出現すること、アバヤーカラグプタの『ニシュパナ・ヨーガーヴァリー』に四面八臂の金剛界大日を説き、ネパールにはその作例が伝わることなどから、一面二臂の金剛界大日に脇手を付加して多面広臂像を作るといふ発想はインドに存在しており、『瑜祇経』は何等かのインド成立の資料に基づいて編纂された可能性があるという。田中氏の重要な指摘は、前掲註3でも引用させていただいた。
- (5) 金胎両部而二不二については、主に以下を参照した。
- ① 伊原照蓮「両部不二と瑜祇経」御遠忌記念出版編纂委員会編『弘法大師と現代』筑摩書房、一九八四年三月、四〇九頁。
- ② 鍵和田聖子「東密における『瑜祇経』解釈の変遷」『龍谷大学大学院文学研究科紀要』三十五、二〇一三年十二月。
- (6) 安原賢道「瑜祇経の研究」(一)(二)『密教研究』四十五、四十六、一九三二年七月、十二月。
- (7) 有賀祥隆「愛のほとけ—愛染明王」『講座密教文化』三 密教のほとけたち、人文書院、一九九一年八月、一七五頁。
- (8) 『大正新脩大藏経』18―二五八頁b。
- (9) 前掲註3。
- (10) 泉武夫「仏画の造形」吉川弘文館、一九九五年八月、一五一頁。
- (11) 泉武夫 作品解説「如意輪観音像」『王朝の仏画と儀礼』至文堂、二〇〇〇年十一月、三三三頁、前掲註10、一五七頁。
- (12) 吉村稔子 作品解説「虚空蔵菩薩像」『醍醐寺大観』二、岩波書店、二〇〇二年、解説三〇頁。
- (13) 前掲註10。
- (14) 沖松健次郎 表紙解説「般若菩薩像」『MUSEUM』六二四、東京国立博物館、二〇一〇年二月。
- (15) 『大正新脩大藏経』19―三三二a。
- (16) 前掲註3。
- (17) 『大正新脩大藏経』図像三一―一八c。

- (18) 『大日本仏教全書』 五二、図像部二、二五七頁上。
- (19) 鳴滝常楽院伝来『図像抄』所収の図の下には「経説小異也十二臂 次第如必要列」と注記するが、『別尊雜記』や『覚禪鈔』に引用されていない。
- (20) 県立金沢文庫所蔵称名寺聖教 二八八函一三四。
外題に「諸口伝集(自言)」、内題には「口伝記」と記載する。識語は以下の通り(改行は/で表記、「()」内はわたくしによる)。
本云 健保四年五月廿日於香隆寺之辺書寫了/求法末資禪遍/翌日比校了/建長七年七月十四日賜御本 同十八日書寫終功了/求法末資成遍/及斜日比校了/永仁五年四月十五日賜御本書寫了 日(同カ)校了 求法末資良朝 一了了/于時元弘三年十一月十五日賜御本書寫了、求法末資熙充。
- (21) 『大正新脩大藏經』 図像五・五六一b。
- (22) 田村隆照「図像抄 成立と内容に関する問題」『仏教芸術』七十、毎日新聞社、一九六九年三月。
このなかで『覚禪鈔』の「十卷抄云智証請来像如此云々 或有宝冠云々」という書き込みをもって間接的に請来像とみなされている。
- (23) 『大正新脩大藏經』 図像三・三三五七。
- (24) 仏教美術研究上野記念財団助成研究会研究報告書『図像蒐成』IX、二〇〇四年三月、一〇頁。
- (25) 柳澤孝 作品解説「愛染曼荼羅」『在外日本の至宝』一 仏教絵画、一九八〇年九月、一五二頁。
- (26) 『大正新脩大藏經』 75・八九九a。
- (27) 『大正新脩大藏經』 図像五・二五七a。
- (28) 醍醐寺本「灌頂師資相承血脉」築島裕翻刻『醍醐寺文化財研究所研究紀要』一
- (29) 芳源ならびに恵什については、川村知行「白描図像の伝来における醍醐寺本図像抄に関する調査研究」(課題番号一〇六一〇〇五七 研究成果報告書、二〇〇一年三月)を参照した。
- (30) 鍵和田聖子「日本密教における『瑜祇經』諸説の尊格理解」『印度学仏教学研究』一三七、二〇一五年十二月。
- (31) 『大正新脩大藏經』 76・五五四b。
- (32) 『園城寺文書』七、園城寺、二〇〇四年八月、一三四頁上。
- (33) 『大正新脩大藏經』 図像十二・四二四a。
- (34) 『真言宗全書』二十八、二九八頁上。
- (35) 「一切如来大勝金剛頂最勝真言三昧耶品次第観念」については、真保龍敏「弘法大師と『瑜祇經』(御遠忌記念出版編纂委員会編『弘法大師と現代』筑摩書房、一九八四年三月、四三七頁)を参照した。
- (36) 上田靈城『真言密教事相概説』―諸尊法・灌頂部―〔上〕同朋舎出版、一九八九年十二月、二二〇頁。
- (37) 前掲註29。
- (38) 『大正新脩大藏經』 78・二五一c。
- (39) 『大正新脩大藏經』 78・八〇二a。
- (40) 『大正新脩大藏經』 19・三六八b。
- (41) 『大正新脩大藏經』 図像四・五六一b。
- (42) なお小野流の一である安祥寺流では、流祖宗意(一〇七四〜一一四八)から法流を継承した実厳(一一八五頃)が安祥寺寺域に建てた大勝金剛院を中心に伝流したというが(梶川敏夫・上原真人「第一章 安祥寺の歴史と環境」『安祥寺の研究』I―京都市山科区所在の平安時代初期の山林寺院―、京都大学大学院文学研究科二世紀COEプログラム『グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成』、一一頁)、大勝金剛をどのように理解していたかは明らかでない。時代は下るが浄厳(一六三九〜一七〇二)『最秘部類集』「大勝金剛」(国書データベース <https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100223619/69?n=ja>) (二〇一五年五月三十日最終閲覧)には、
此ノ尊八十二臂ノ大日ト習也、又十二臂ノ愛染王トモ習也、又十二臂ノ金剛薩埵トモ習也畢竟三尊亦三亦一也秘秘
とある。同様のことは慧光(一六六六〜一七三四)『安祥寺流伝授隨筆』卷上「大

勝金剛」国書データベース <https://kokushonri.ac.jp/biblio/100226071/20?ln=ja>
 (二〇二五年五月三十日最終閲覧)、にもみえ

一切如来大勝金剛次第、此大師作。此尊總為等者凡論此瑜祇經總體。有其三
 伝一曰仏眼三昧(山/門)、一曰大勝金剛三昧(三/井)、一曰金剛薩埵三昧
 亦愛染三昧(東/寺)此中金剛薩埵三昧伝即總諸説也。何者如彼仏眼、大勝
 金剛、愛染以薩埵為其本身、此大普賢金剛薩埵即修生大日如来也

とあり、諸宗諸流で説く仏眼仏母、大勝金剛、愛染明王のいずれも金剛薩埵(大
 普賢金剛薩埵)に帰すという。

- (43) 敬愛法とするものに実運編『秘藏金宝抄』『大正金剛法』、勝賢記・守覚輯『秘鈔』
 第十一「大勝金剛」、成賢編『薄双紙』二重第二結「諸仏頂」うち「大勝金剛」、
 興然編『五十卷鈔』第二十二「大勝金剛法」、頼瑜編『秘鈔問答』卷第十「大勝
 金剛」などがある。息災法とするものに興然編『四卷』第二「大勝金剛法」など
 がある。

- (44) 道範編『ユギソタラン口伝』下「大勝金剛頂品」第八の裏書「建保六年(戊寅)
 仲秋比、中宮御産平安御祈被修大勝金剛法云々 此付息災行之歟」(『統真言宗全
 書』七、二九頁下)

(45) 『真言宗全書』二十八、三〇二頁上。

(46) 県立金沢文庫所蔵称名寺聖教 二八八函一三四、前掲註20。

なお『覚禪鈔』卷第十六「大勝金剛」上「延寿先跡」に引用されている(『大正
 新脩大藏經』図像四一五六一b)。

(47) 『大正新脩大藏經』図像四一五六八b。

(48) 林温 作品解説「馬頭・大勝金剛・馬鳴曇荼羅・六字天図像」『醍醐寺大観』二、
 岩波書店、二〇〇二年五月、解説七八頁。

(49) 内田啓一「瑜祇經所説の三昧耶形図について」『密教図像』十八、一九九九年十
 二月。

(50) 真鍋俊照「三部字輪観図像の成立」『印度学仏教学研究』五十、一九七七年三月

(51) 前掲註49、50。

(52) 『大正新脩大藏經』図像四一五六二a。